

サイエンス コミュニケーターだより

Volume 3
March, 2016

みなさんは「サイエンスコミュニケーター」を知っていますか？ サイエンスコミュニケーターとは、社会のいろいろな場面で「人」と「科学・技術」をつなぐ人材です。国立科学博物館も、2006年度から「サイエンスコミュニケーター養成実践講座」を開講し、その修了生はいまや200名以上となっています。

本誌は、国立科学博物館の講座を修了したサイエンスコミュニケーターでつくる有志団体「国立科学博物館サイエンスコミュニケーター・アソシエーション（科博 SCA）」と、みなさんをつなぐ広報誌です。科学をさまざまなかたちで伝え、広めて共有していくコミュニケーターたちの横顔をご覧ください。

サイエンスコミュニケーターの声 表現者であること

「サイエンスコミュニケーターは、表現者であるべき」。科博のサイエンスコミュニケーター養成実践講座で学んだなかで、もっとも印象に残っていることばです。

講座を受けたのは、東京藝術大学の博士課程に進学して2年目でした。研究者以外の道の可能性も考えて講座の受講を決めたのですが、結局はその当時はじめた研究を今でも続けています。絵を描く心の起源をテーマに、進化の隣人であるチンパンジーと、ヒトの子どもの発達過程を比較する研究です。

そこに至るまでの経歴は、われながらなかなかの紆余曲折ぶり。京都大学の理学部から、医学研究科の修士課程を経て、最終的にたどり着いたのが、芸大でした。その間、国内外のフィールドワークに出かけたり、崖から落ちて背骨を折る出来事があったり、進路に悩んで京都を歩きまわったり、経緯を語り出すと紙面に収まらないので、ここでは控えます。でも、今にして思えば、曲がりくねった道を歩いてきたことで、他の人とは違った景色を眺めることができたのかもしれない。

さて、冒頭の「表現者であるべき」という言葉。それは、情報をただわかりやすく、おもしろく伝えるだけではだめだということでした。自分なりの視点や切り口を持って伝える。それが「表現者」であるということ、そう理解しています。

現在わたしは、私立大学の教育学部で教員をしていて、いわゆるサイエンスコミュニケーターではありません。科学系の科目も受け持っていますが、おもな担当授業は図画工作の実技だったりします。それでも、講義形式の授業をしたり、一般向けの文章を執筆したりするときには、つねに「表現者」であることを心がけています。

おもしろい切り口を探し出すには、伝えたい内容をさまざまな視点から眺めます。そのためには、知識を広げ理解を深

める必要があるのも、時間も労力もかかります。それでも、うまく切り口が見つかるとうまく伝わるという実感があります。そして、自分自身にも新鮮な気づきをもたらしてくれます。

その姿勢は、じつはアートにも共通するようになっていくように感じています。アーティストは、世界を独自の切り口で切り取って、新たなものの見え方に気づかせてくれる。それがアートの大きな魅力だと思うからです。

チンパンジーや幼児のような、自ら語らない対象と接していると、かれらがどのように世界を見ているのか、こちらが相手の目線に立って考えることが必要な場面が多くあります。視点を変えてものごとを見る力は、そういうところでも鍛えられている気がします。

サイエンスとアート。「描く」という行為に焦点をあて、認知科学からアートにアプローチする研究をしてきました。それこそ、狭い視野ではたちうちできない挑戦です。今後はさらに多角的な視点を身につけ、自分なりの切り口を見つける嗅覚をどんどん磨いていきたいと思っています。



絵を描くチンパンジーのアイ
(京都大学霊長類研究所)



齋藤 亜矢

国立科学博物館サイエンスコミュニケーター養成実践講座 SC1 修了。現在、中部学院大学教育学部准教授。2016年4月より、京都造形芸術大学准教授。著書に、『ヒトはなぜ絵を描くのかー芸術認知科学への招待』（岩波科学ライブラリー）ほか。

新代表挨拶



昨年5月に新代表に就任しました水川薫子です。2011年に発足した科博SCAは、運営委員を中心に4年間試行錯誤しながら組織作りを行ってきました。発足当初はああしたい！これやってみよう！という気持ちだけで回してきた部分もありましたが、これからはこれまで作った仕組みを会員のみなさんに継続的に活用してもらいながら、一緒に作り上げていく段階に移ってきたなと感じているところです。

そんな中での新体制、ゆるく長く続けられるサイエンスコミュニケーションの場の構築を目指しながら、少しずつ外部との連携も増やしていきたいと考えています。これからの科博SCAの活動にぜひご注目ください！
(科博SCA代表 水川 薫子)

活動紹介

科博SCAの会員は、サイエンスコミュニケーションに関連するさまざまな活動を行っています。今回は、高校へ向出して開催したキャリアイベントと、サイエンスコミュニケーター養成実践講座のプログラムの一部として開催された2つのトークイベントをご紹介します。

高校生へ理系ライフを紹介する出張イベントを開催！

「理系ライフ体験」(2015年7月11日開催)



高校の先生からの依頼で、理系の大学生や社会人の生活を紹介するイベントを出張開催しました。話題提供者が普段の理系ライフについて、ファシリテータを介して参加者と会話しながら紹介するものです。今回は、5会場同時開催という、10名が登壇する大イベントでしたので、登壇者を募る際には、SCAのネットワークがとても有用でした。

高校へ向出したことで、科学に関心の低い生徒さんにも理系のキャリアの魅力を紹介でき、よかったです。また、出張イベントの企画・調整は、とても良い経験となりました。

(科博SCAサイエンスカフェ分科会 古垣内 彩)

「化石少年」たちと会えた日

2015年度SC講座受講生ディスカバリートーク その①(2015年8月17日開催)



私は「マイクロな化石で地球を探る」と題し、^{ゆうこうちゅう}有孔虫と呼ばれる微生物の化石と地球環境変動、そして最後の氷期が終わった時代(約1万3000年前)に起こった生物の絶滅についてお話ししました。科博に何年も通っている化石好きの少年たちが最前列に陣取り、積極的に盛り上げてくれたことが印象的でした。彼らをはじめ参加者の皆様からは話し方や内容について、そして今後聞きたいテーマについての建設的なご意見をいただき、サイエンスコミュニケーターとしてだけでなく研究者としても大いにモチベーションが上がりました。

(SC講座10期修了生 芝原 暁彦)

「フェアブルの愛」

2015年度SC講座受講生ディスカバリートーク その②(2015年8月18日開催)



フェアブルの「愛のまなざしを追う」というテーマで、ディスカバリートークを行いました。取り上げたのは、『昆虫記』第5巻「アリとセミの寓話—セミに対する誤解」です。フェアブルはここに、セミの生き様を綴った長大な詩を収めています。「アリとセミ」(『イソップ物語』所収)をフランスに伝えた、ラ・フォンテーヌに対抗しているのです。単なる観察記録にとどまらず、言葉を駆使してその生態を伝えようとするフェアブルの姿勢に、セミに対する愛を感じます。トークでは、地図や写真、朗読を交えて、小さいお子さまにも楽しんでいただけるように工夫しました。

(SC講座10期修了生 明石 雅子)